英語教育実践研究会

授業実践研究

第 5 号

巻頭言 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第 5 回研究会事例発表 1 ・・・・・・・・・2
第 5 回研究会事例発表 2 ・・・・・・・・・4
会員の広場 ・・・・・・・・・・・・・・・・6
2021 年度研究会活動報告・・・・・・・・・8
会計報告・・・・・・・・・・・・・・・・・9
2022 年度研究会のご案内 ・・・・・・・・・9
編集後記 ・・・・・・・・・・・・・・・・9

＊＊＊＊ 巻　頭　言 ＊＊＊＊

当たり前の教育とは
ウイズコロナからポストコロナへ

中村　公子
（戸板女子短期大学）

2019 年末に発生した新型コロナウイルス感染症という未曽有の危機は、日本のあらゆる社会構造を大きく変化させた。我々が身を置く高等教育の世界も決して例外ではなく、このわずか 2 年余りでかつて経験したことのないほどのスピードでその在り方が驚くほど様変わりした。昨日まで当たり前であったことが、突然当たり前でなくなる、そんな変化が学校教育の現場で起こることなど誰が予想できたであろうか。

例えば日々の授業。2019 年当時は、ICT の活用とアクティブラーニングが浸透し、授業のスタイルは旧来のものからはかなり進化しつつあったが、それでもまだ対面での講義型授業から抜け出せずにいるのが当たり前の現実であった。ところが、である。コロナウイルスの蔓延とともに、突然の休校、その後も長く続いた学生の登校禁止措置で、待ったなしのオンライン授業を余儀なくされた。すっかり頭の固くなった我々多くの教員は Zoom？Classroom？という段階からスタートせねばならず、否応なしに脳細胞がフル回転するような刺激的な毎日を送ることとなった。更にこの間、登校できない学生たちの不満が SNS 上を席捲したのも記憶に新しい。しかし、人間の順応性とはかくもすごいもので、1 年もすると教員たちは何事もなかったかのようにそれらの機材を操り、オンラインでの授業はもとより課題のやり取りからテストまで難なくこなせるようになった。デジタルネイティブ世代の学生にとってはその受け入れに何の支障もなく、教員も学生もこれがウイズコロナ時代の教育の在り方であると、当たり前と化した。

そして現在、コロナウイルスの変異と猛威は止まるところを知らず、それに操られるように教育の形も人も心も変わり続けている。徐々に学校へと戻り始めた学生たちが現在受けているのは、対面とオンラインが混在するハイブリッド型授業である。あれほど対面授業の再開を叫んでいた学生はすっかりその鳴りを潜め、今ではこのままオンラインやハイブリッドの授業を続けてほしいとの声が圧倒的である。人との関わりが面倒くさいと感じる今どきの若者にとって、これが今現在の当たり前の形なのである。

果たしてポストコロナの時代には一体何が当たり前になるのだろうか。時代とともに当たり前が変化するのは仕方のないことであり、我々はそれを受け入れて順応していかねばならない。しかし、どんなに時代が変わっても失ってはならないものもある。大学生にとって、鬱陶しいほどの濃密な人間関係の中で過ごす時間や、新しい世界との出会いなどもその 1 つであろう。どれほど予測不可能な時代になっても、どれほど教育の在り方が変わっても、そしてどれほど鬱陶しがられても、大学生たちに失ってはならない時間や経験を与えることこそが、我々高等教育に携わる者の使命なのではないだろうか。

2021 年 10 月 16 日、オンライン開催
2021 年第 5 回英語教育実践研究会
事例発表 1

COIL 型教育の始め方
―ICT 活用による英語学習実践

水口小百合
（江戸川大学）

１．はじめに

本稿は、新型コロナウイルス感染症の拡大によって余儀なくされた変化の中で、唯一の肯定的変化とも言える ICT ツールの普及に応じた新たな実践的英語学習の試みについて報告するものである。

2. COIL 型教育と着手の好機

2021 年 7 月、日本私立大学連盟発行の情報誌『大学時報』第 399 号において、「オンライン留学の課題と可能性」という小特集が組まれた。その中に、文科省が 2018 年に強化事業として補助金交付を行った COIL 型教育の先駆け校である関西大学所属の池田佳子氏による寄稿がある。池田(2021, p. 92)は、コロナ禍で俄に注目されてきた「オンライン留学」という言葉について、「渡航留学」の第二の選択肢、いわゆる「廉価版オプション」という位置付けが助長されるとして、既に存在している名称である「COIL 型教育」のより広い認知を訴えている。

COIL ＝ Collaborative Online International Learning（国際協働オンライン学習）は、海外の大学の科目（クラスルーム）と国内の科目（クラスルーム）がペアを組み、それぞれのクラスの履修学生が混合でバーチャルの国際的な小グループを形成し、遠隔で繋がりながら、主体的な行動を元とした PBL プロジェクト型の活動を行うものである(池田, 2021, p. 91)。ICT ツールが、便利さを追求する我々の現代生活に伴い発展してきたことを考えると、COIL は、財政面という留学における高いハードルを越えられるだけでなく、海外をより身近な対象と捉え、また、海外留学をより促進する効果も期待できる(池田 92)。

ただし、COIL 型教育は、一定期間の継続的な活動を必要とする教育方法であり、その実現には以下に挙げるようなシステムの構築が必要となる。①両大学の対象学生の専門性・習熟度に見合うプロジェクト内容の計画・決定、②成果物発表までの教育目的を含むシラバス設計、③プロジェクトの規模を考慮に入れた実施可能性の検討、④両校のアカデミックイヤー・時差を考慮したスケジュール調整、⑤学科所属教員および大学の国際交流センターとの連携・報告、⑥助成金獲得に向けた独自性の開発。関係部署との連携が必要なのは明らかであり、また、これらが上手く機能するには、時機に投じて取り掛かり始めることも必要である。

そして、システム構築と同様に重要なのが、参加学生の内発的動機が刺激されることである。具体的には、ICT ツールを活用したコミュニケーションでも、対面のコミュニケーションで行われるのと同程度の能力を発揮できるかどうかだ。基礎的な語学力はもとより、共感力や調整力といったコミュニケーション力を学習者が発揮できるかを見極めることが必要である[1]。

そこで筆者は、COIL 型教育に着手として、一回完結型のオンライン異文化交流会を開催し、学習者の総合的コミュニケーション力を観察することにした。

3. トライアル：オンライン異文化交流会

コロナ禍に際し、筆者の勤務校の学園祭は昨年度に引き続きオンラインで行われることになった。これも ICT ツールの普及の一つの事例である。筆者はこの機会を利用して、オンライン

[1] 浅野享三(2018, p.100)は人工知能時代における技能教育を前面に出さない教育として「他者と共感する力」を育成する可能性を指摘している。

異文化交流会を開催した。

オンラインでのバーチャル環境を Google Meet 上に用意し、参加学生と海外からの方を繋ぎ、1 時間程度の交流会を計画した。注意点としては、ネガティブな緊張感をできるだけ和らげ、内発的動機の増進を図ることであった。そのため、海外からは、外国語教育の教授に長けており、また、筆者の教育哲学を熟知している、筆者の留学時の同窓生である台湾人の英語教員（以後 W 先生）に参加を依頼した。方法は、参加学生が自己紹介を兼ねた質問形式の英文を W 先生に話し、W 先生が英語で回答するというインタビュー形式を取った。

参加学生のうち交流会の大部分を担う筆者のゼミ学生には、W 先生についての情報は、筆者の友人であることを伝えるのみとし、その他の事項で知りたい事は、インタビューの中で質問するように伝えた。

また、ゼミ学生以外も参加自由としておき、即席でインタビューを行う学生がいるかどうかも見ることとした。

4. ICT を介した総合的コミュニケーション力

計画していた想定質問の発話とそれへの回答がやりとりされた中で、いくつかの総合的コミュニケーション力が観察されたので、紹介する。

一つは、学生の柔軟な交渉力である。ある学生（以下学生 K）は、まず想定質問で「日本は好きですか？日本を訪れたことがありますか？」というとてもシンプルな質問をした。それに対し W 先生は好きであること、そして複数回日本を旅行したことがあり、訪れた都市を列挙してくれるという十分すぎる内容を回答してくれた。その後、W 先生は “Do you have any other questions?” と促した。 “No, that’s all, thank you so much.” というような言い方で自分の質問パートを終えることも可能だったが、学生 K は、用意していなかった質問を更に続けた。内容は、W 先生のプライベートに関することであり、W 先生は少し躊躇しつつも、ジョークを交えつつ真摯に回答してくれた。交流会後の学生 K からの聞き取りで、W 先生のフレンドリーな応答から、プライベートな質問に踏み込んでも良さそうな雰囲気を感じたためということであった。

このように、学生の中には、ICT ツールを介しても相手の雰囲気を感じ取り、柔軟に豊かなコミュニケーションを作り上げようとする瞬発力、判断力があることが垣間見られた。

筆者は、今回のオンライン異文化交流会の中で、学生がネガティブな緊張感を持たないように援助するつもりだったが、実際には筆者の援助は必要でなく、学生の緊張感は、交流をする中でポジティブな緊張感へと変化していったことが観察できた。学生からは、今後も海外の人とコミュニケーションを取りたいという声も複数聞かれ、参加学生の内発的動機の増進が見られたと思われる。

5. 課題と今度の計画

来年度は、COIL 型教育を始めることとした。大学が提携を結んでいるタイ王国と連携し、協働プロジェクトを実施予定である。運よく、相手校の教員が COIL 型教育を経験済みであったため、プロジェクト完了時には、成果物を学内外に公開するという設定も行った。上記のような 2 の①から⑥のシステム構築を完了したので、今後はテーマ毎の PBT 型ドキュメンタリー動画を作成することとする。テーマは、現在の状況に即すものを選び、「コロナ禍を経ても失われないもの」とする。

加えて、もう一つのプロジェクトとして、ニュージーランドの大学の日本学科の学生を対象として、遠隔ツールを用いてオンライン文化交流カフェを開く予定である。

参考文献

浅野享三(2018)「人工知能時代の外国語教育」『南山大学短期大学部紀要』終刊号, 95-105.

池田佳子(2021)「コロナ禍期の COIL 型教育とポストコロナ禍期での展開」『大学時報』第 399 号, 90-95.

2021 年 10 月 16 日、オンライン開催
2021 年第 5 回英語教育実践研究会
事例発表 2

Dos and Don’ts of Online Video Teaching

Robert Edick
（ELEC）

In the current times, we are being forced to switch from the classroom setting, which is face-to-face, to online video platforms. Some things that work in the classroom don’t work so well online. This article will focus on some dos and don’ts for online video teaching. These ideas will work on different platforms, Zoom or Google Meet. There are ideas for all parts of a lesson, from pre-lesson to during the lesson to finally post-lesson.

Pre-Lesson

The focus will be on the dos and don’ts to consider before the lesson begins. We are starting with the platforms, then moving to the instructor setup, followed by the expectations of the students, and lastly, the lesson plan.

Do know your video platform. There are two leading video platforms, Zoom and Google Meet. They do the same thing and provide similar functions. So, the first thing is to know the program and what it can and can’t do. They both have pluses and minuses.

Next is your setup. Don’t have a background and find a blank or a simply designed wall. Then the students must focus on you. Don’t have the camera pointing up your nose. Do raise the computer, so the camera is pointed down on your head. It is a more appealing look.

Do tell the students what behavior is expected from them. It is excellent to go over this during the first class.

Here is an example list of Online Rules and the reasons for each.

1. Join the meeting 5 minutes before the class starts. (Don’t waste time at the start of class letting all the students in the room.)
2. When the lesson starts, turn on your camera. (To make sure the student’s camera works.)
3. The only background you can use is Blur or Semi-Blur. (Use only blur or semi-blur backgrounds because other backgrounds can hide the person’s face and people in the background.)
4. Leave your camera on during the whole lesson. (The teacher can see the student’s reaction to directions and explanations. Therefore, the teacher can see if things are understood. Also, to see if the students are focused on the tasks. Lastly, the comfort of other students. Some people don’t feel comfortable working with a partner if they can’t see another person’s face. They don’t know who they are talking to or who is listening.)
5. You will be called on to turn on your mic during the class. (Let the students know that they must be ready to answer at any time; therefore, they should pay attention.)
6. At the start of the class, open the chat function of Zoom or Google Meet. (This is an easy way for the students to interact with the teacher during the lesson.)
7. For attendance, the teacher will call your name; you will turn on your mic and say “YES.” After you will write “yes” in the chat. (These are done to make sure the student’s mic works and they open the chat.)
8. If you have any problems with your camera, mic, wifi, or computer, write a message in the chat. (The chat will be saved after the lesson, so there is a record of who has problems with their computer, camera, speakers, mic, or wifi and when.)

The last one is planning your lesson. Do spend more time on it. Do write it out in a word document. Think about your directions for teaching activities

and write them out. Decide what functions on the video platform you will use. For example, using the blackboard, screen sharing, a slide presentation, or using the chat might take you a lot longer to plan a video lesson than a face-to-face one. Therefore, budget more time for it.

During the lesson

Moving on to the dos and don'ts during the lesson, many things can be covered, but here is the focus on presenting materials, attendance, "chesting," CCQs, pronunciation activities, breakout rooms, and reporting.

There are three ways to present material in a lesson: the blackboard, screen sharing, or chat. The blackboard is where the teacher can write information. Next is screen sharing of slides, word documents, or pdfs. The last one is the chat. The simplest and least time-consuming is the chat.

Next, take attendance at the beginning of the lesson as stated above.

During the whole lesson, do "chesting." "Chesting" is when the teacher puts the textbook in front of them and points to the part of it that is being focused on. This action draws the students' attention to that part of the book.

Also, do use CCQs (Concept Checking Questions) for everything. If the teacher is lucky, they have 70% of the students' attention during the lesson. There are many other things that the students could be doing simultaneously. Therefore, it is crucial to ensure the students are following the lesson. This is everything from checking the main idea of the lesson to what activity is being done next. Random students should be asked these questions, not just the good ones. That makes all the students pay attention. Also, have the students give a physical sign that they understand. Having the students give an "ok" indication is good.

Don't do any repeating pronunciation activities during the lesson. Most students will not do them. So, only the teacher says the words, and the students do nothing. Therefore, it is a waste of class time.

When the students are in breakout rooms, often check on them during group activities. There are three reasons for this. First, to make sure students understand what to do. The second is to make sure they do the work during the activity. The students need to be checked on a few times during the exercises. The last one is to see if the students are finished or need more time.

Lastly, have the students report what they have done in the breakout rooms to the class. Pick groups randomly and choose more than one group. That makes sure that all groups do something.

Post Lesson

Three things should be done after the lesson. First, answer any questions that the students might have. Tell the students who have questions to wait until most of the students have left before asking their questions. Next, give the students an email address or another way to contact the teacher between lessons. Lastly, think about any tech or teaching problems and think of ways to solve them.

There are many ways to do online video lessons. This article has focused on some of the dos and don'ts for each part of online video lessons. There were over 15 ideas that were introduced, but the two most essential are the Online Rules and the CCQs. This is because they had the most significant effect on the smoothness of lessons. Try these two ideas or some of the others in future online classes.

会員の広場

論理的思考力を育む英作文とは？

奥田 洋子
（（元）跡見学園女子大学）

ごく一部の大学を除き、今、日本の大学の英語教育で一番疎かにされているのは「話す」、「聴く」、「読む」ではなく、「書く」技能、すなわち英作文ではないだろうか。「書く」と言ってもセンテンス単位の英作文や和文英訳のことではない。「序論」、「本論」、「結論」で構成されたパラグラフ単位の文章の作成である。

学習指導要領の改訂により、2020 年から小学校でプログラミング教育が必修になった。プログラミング教育の目的のひとつは論理的思考力の育成だとされるが、これは何もプログラミング教育に限ったものではない。ある意味、教育の最終的目標は論理的思考力の養成にあると言ってもよい。

イギリスでは論理的思考力を育成するのは四技能の中でも特に「書く」であると考えられており、小学校から感想文ではなく essay（論文形式の短い文章）の書き方を教えている。1980 年ごろ留学中に当時小学校高学年だったイギリス人の子に宿題を見せてもらったところ、ある課題が与えられ、それについて賛成と反対とそれぞれの立場から essays を 2 本書いて来なさい、というものであったので少し驚いたことがある。また、大学 1 年生向けの *Writing for University*（Palgrave, 2011）というテキストには、「分かりやすく書くための知識と技能を身に付けることは大切である。書くことは、思考を順序立てて展開する力、理解力、発想力、そして教員とコミュニケートする力とを与えてくれる」と明記されている。ここで言う「思考を順序立てて展開する力」とはすなわち、何よりも読み手（聞き手）の立場に立って分かり易く説明する力である。

「作文」を表す語彙のひとつに“composition”という語がある。“composition”の第一義は「構成」もしくは「組み立て」である。このことから、論理的な文章を書く上で一番重要なのはその構成、すなわち順序立てであることが推測できる。レポートで言えば、分かりやすい順序にセンテンスやパラグラフを並び替え、その上で不必要なセンテンスやパラグラフは削り、必要なものは書き足す作業を指す。そして、このような作業をこなす技能は、英語であれ日本語であれ、文法や語彙の勉強だけでは身に付かない。また、優れた評論文をどれだけ読んでも、自分自身の思考を推敲する力は付かないのである。

それでは、大学の英語教育ではどのようにして学生に自分の思考内容を組み立て直す力を教えることができるだろうか。

（1）一つ目は、従来の語句整序問題に倣って、ごく短い意見文のパラグラフを順不同で示し、筋道を立てて並べ替えさせるパラグラフの並べ替え問題である。数十年前から、*Effective Writing*（Cambridge University Press: 1987）などのテキストに導入されている。語句整序問題が文法や構文、単語や熟語の知識を問うものだとしたら、パラグラフ整序問題は、論理的展開力、推測力、さらには想像力を問う問題である。語彙や文法の難易度を落とせば 1 年次の英語の授業にも導入できるのではないだろうか。

（2）二つ目は、要約文（summary）の作成である。要約文作成の目的は、「読む」よりもむしろ「書く」技能の養成にある。もちろん読解力は必要とするが、それよりもはるかに「書く」力を要するからである。読み手をしっかり念頭において、どのような順序で要点をまとめれば読み手がフォローし易いかを考えて要約する。原文の語彙をそのまま使うのではなく、もっと適切な語彙があればそれに置き換え、場合によっては、原文の論理の展開をより分かりやすくするために要約では要点を挙げる順序を変えて

もよいのである。単なる並べ替えよりも論理的思考力の養成には効果的な学習方法である。

（3）そして最後に、自由英作文である。自己紹介・他己紹介などから始めて最後には必ず意見文を書かせる。自由題で意見文を書くには、語彙力や文法力はもちろん、発想力、想像力、問題解決力、論理的展開力のすべてをフルに働かせる必要がある。

これらの課題、特に（2）と（3）の課題の大きな問題点は添削する教員の労力であろう。イギリスの中学・高校の教員にとって一番大変なのは生徒が定期的に提出する小論文の添削だと聞いたことがある。一般的に日本の中学・高校の教員は他国の教員に比べて、生徒指導や書類の作成、クラブの顧問などの仕事に追われて重労働を強いられていると言われるが、不思議なことにその仕事の中に生徒ひとりひとりの作文の添削が入っているというのを聞いたことがない。

論理的思考力が国語で十分養成されていないのでプログラミング教育でそれを埋め合わせようとしても限界があると思う。筋道を立てて思考する力というのは何も国語教育やプログラミング教育に限らず、英語の作文教育でも身に付けることができる。これからは英語教育でも、中高レベルであれ大学レベルであれ、国語教育やプログラミング教育と連携して、学生の論理的思考力を伸ばす教育に貢献すべきではないだろうか。そして、そのために何よりも効果的なのは、論理的な文章を書かせることであり、それに対して教員がコメントすることである。

会員の広場

コロナ禍でのオンライン授業で想うこと
－発音中心の英語教育初年度に－

池田るり子
（産業能率大学）

2022 年新年を迎え、2020 年度からすべての海外研修が中止となり、2 年間を経てもなお、学生を海外へ送れないでいる現実にどうしたものかと自問自答しておりました。2022 年度の夏季海外研修もすでに中止が決定しています。

学生を海外に送る仕事に携わって、32 年目。海外へ夢を抱き入学してきた学生へのお手伝いができないまま、海外研修がらみの業務からは解放され、ほっとしている自分がいるのも不思議な感覚です。

英語授業は、コロナ禍の中、対面授業が中止になり、それでも授業を続けていけたのは、デジタル技術のおかげだと。対面の英語授業しか経験したことがなかった私でしたが、いざ、オンライン授業を始めてみると、メリットもたくさんありました。

英語の苦手な学生や大学へ登校するのがしんどいと思っている学生の欠席や遅刻が全くなかったことです。欠席、遅刻がないので、オンタイムで気持ちよく授業が始められることも新鮮でした。

2020 年度から 12 名の英語専任教員組織で発音を中心とした新しい 1 年生必修英語授業をスタートさせました。教員間の資料の共有や情報交換会議、教員研修が思っていた以上に容易にできたこと、自宅で対応できましたので、ある意味、通勤時間が浮いた時間を準備に充てられたこと、時短効果も大きかったと思います。

同時に、発音中心の英語教育初年度のオンラ

イン授業では、顔と名前がアップされるので、名前の呼びかけも容易でしたし、個室状態になるので、学生も他のクラスメイトの反応を気にせずに堂々と発音しており、また、zoom 機能によってグループ分けを 1 名づつにすると、プライベートレッスン状態で、表情や口の形もよく見れるし、個別の英語力の把握や指導も容易にできました。

また、リアルタイムで、前期は、オンラインで海外に住んでいる外国人とつなげることができました。28 回の授業の中に、外国人ゲスト 3 名を 2 回招いて、実際に英語を使う機会としていましたが、オンラインでの可能性も広がりました。

後期からマスクでの対面授業が始まって気づいたことがあります。

オンラインのようにはいかない面がたくさんあったので、対面授業になって学生からの不満が大きくなるのではないかという懸念が払拭されたことです。英語は唯一、週 2 回、対面で仲間たちと会える授業でした。時間と共にとても仲良くなって、発音アプリを使って確認する場面では、できなかった学生が、発音が良くできた学生にコツを聞いたり、発音指導をしていたり、うまく発音ができるようになったときは、お互いが楽しそうに笑っている姿を見て、対面では、相互教授の効果があるのだと確信しました。また、グループにお題をだして、会話を作成し、発表する場面では、みんなで考える時間がとても楽しそうで、寸劇に近いパフォーマンスでは、みんなの笑い声や称賛するリアクションがあり、発表する側も聞く側もオンラインでは見れなかった感情反応が見られたことです。みんなで集まって、課題に対して、仲間と共に「なぜ」と立ち止まって考える時間も授業では大切なことだとわかりました。人は人を求めるもの。人と関わることで学べることがたくさんあるのだと実感しました。心から、今まで通りの普通の教室での授業や学生たちの笑い声が響くキャンパスにいち早く戻ることを祈りながら、今後もマスクでの対面授業を続けていきます。

【2021 年度研究会 活動報告】

2021 年第 5 回英語教育実践研究会

日時：2021 年 10 月 16 日(土)
　　10：00～15：00
会場：オンライン開催
プログラム:10:00～10:05 開会の挨拶
　　10:05～11:05 事例発表 1
　　11:10～12:10 事例発表 2
　　13:30～15:00 情報交換会
　　15:00～15:05 閉会の挨拶

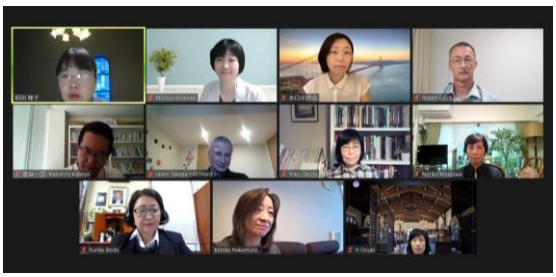
本研究会では初めての試みであった「オンライン開催」による研究会も、12 名の参加者を得て無事に終了した。

まず事例発表 1 では、水口小百合氏が英語教育を取り巻く状況に関して、グローバル化と ICT 利用という観点からの報告をなさった。情報学系の学生へのアンケート結果によると、多くの学生が ICT 使用は英語学習に効果的であると回答したことが示された。

また事例発表 2 では、Robert Edick 氏からオンライン授業におけるやるべきこととやってはいけないことが具体的に示された。自分の授業方法に不安を抱いていた筆者にとっては、学生の注意を引きつける方法や効果的なプレゼンテーションの方法など多くの学びを得ることができた。

休憩を挟んでの情報交換会では、「ウィズ・コロナ時代の英語教育」というテーマで、参加者のオンライン授業での苦労と工夫、テストや評価の問題、オンライン留学など活発に意見が交わされた。

（前田隆子）



＜第 5 回研究会の様子＞

＊＊＊ 会　計　報　告 ＊＊＊

本研究会は独立した研究会で、活動はすべて本研究会の参加費のみで運営されています。この場を借りて、2021 年度の会計報告を致します。

収入の部
74,898 円　(前年度繰越金)
計 74,898 円

支出の部
0 円
計 74,898 円

収入－支出 = 74,898 円 (次年度繰越金)

2022 年 2 月 21 日　会計報告　前田隆子
会計監査　北川宣子

＊＊＊ 2022 年度研究会のご案内 ＊＊＊

◆夏季ワークショップ
日時：2022 年 8 月 29 日(月) 14：00～16：00
会場：戸板女子短期大学（田町駅より 7 分）
講演：「リーダーズ・シアターを応用した読解と音声表現指導―Making Words Come Alive through Readers Theatre―」
※使用言語は日本語
講演者：浅野享三（(元) 南山大学教授）

◆第 6 回英語教育実践研究会
日時：2022 年 10 月 9 日(日) 10：00～16：00
会場：戸板女子短期大学（田町駅より 7 分）
講演：「大学教育における遠隔授業の現状と課題―言語教師の視点から―」
講演者：小澤伊久美（国際基督教大学准教授）
事例発表（募集）/ 情報交換会

上記いずれも、詳細は、本研究会ホームページをご確認ください。また、ご参加のお申し込みは、ホームページの通信欄をご利用ください。

＊＊第 6 回研究会事例発表募集のご案内＊＊

事例発表を募集いたします。皆様の日頃の授業実践の発表の場として、是非ご応募ください。

事例発表：第 6 回英語教育実践研究会
発表日時：2022 年 10 月 9 日（日）
発表時間：60 分（発表＋質疑応答）
発表会場:戸板女子短期大学(田町駅より 7 分)
発表資格： 現在、大学や短期大学で英語の授業を担当している教員、及び学校の種別を問わず、効果的な英語の授業を実践している人、めざしている人
応募締切： 2022 年 7 月 10 日（日）
応募方法： 以下の点を明記し、メールで送付
●自薦 1) 応募者氏名、所属（大学名、学科名、担当科目名、常勤・非常勤）
2) タイトル、要旨（600 字程度）
●他薦 1) 推薦者氏名、所属（大学名、学科名）
2) 被推薦者氏名、所属（大学名、学科名、担当科目名、常勤・非常勤）
3) 他薦の具体的な理由
応募先・問合せ先：本研究会ホームページの通信欄をご利用ください。

なお、事例発表の内容の詳細は、この会報『授業実践研究』の第 6 号に 2 ページ分（和文の場合 21 字× 約 150 行：原稿用紙 8 枚相当）として掲載されます。本会報が、皆様のご研究の公的発表の場となり、授業改善への貴重な情報提供の場となりますことを願っております。

＊＊＊ 編　集　後　記 ＊＊＊

今年度は、研究会を開催したうえで、会報を発行するという通常の流れに沿うことができた。オンラインではあったが、無事に研究会の開催に至り、英語教育に関する情報交換を継続することができたことを嬉しく思う。次年度こそは、対面での開催が可能な状況になることを願うばかりである。　(北脇実千代)

授業実践研究 第 5 号
2022 年 3 月 31 日　発行
英語教育実践研究会
(旧・短期大学英語教育研究会)
編集委員会：前田隆子・中村公子・山崎妙・北脇実千代
英語教育実践研究会ホームページ
http://tan-eiken.jimdo.com/